

Q. なぜ大宜味村は“芭蕉布の里”なの？

A. 「喜如嘉の芭蕉布」ほか多くの芭蕉布がつくられているから！



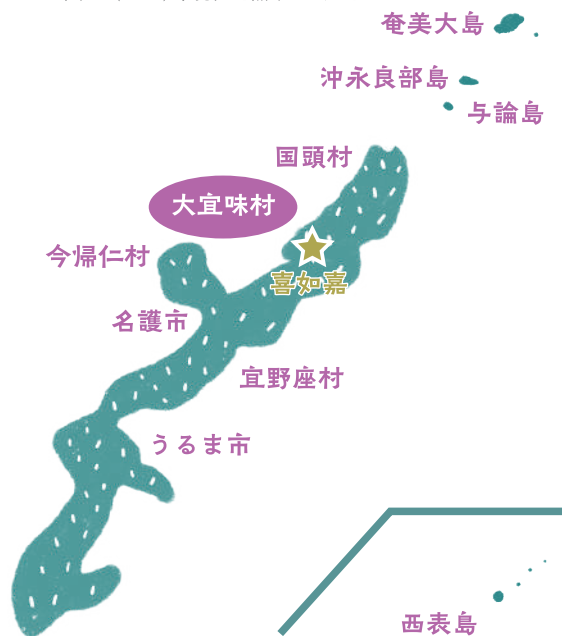
芭蕉布の生産地として知られる喜如嘉地域に建てられたのが大宜味村立芭蕉布会館。館内では喜如嘉の芭蕉布保存会による従事者研修や芭蕉布の品質検査が行われています。

令和8(2026)年現在 芭蕉布の生産地(琉球列島のみ記載・略地図)

沖縄県北部・大宜味村と芭蕉布

大宜味村での芭蕉布生産の記録は明治26(1893)年までさかのぼります。はじめは自家用が中心でしたが、次第に生産量が増加。昭和15(1940)年には県の補助を受け、饒波、喜如嘉、謝名城の村内3地区に芭蕉布工場が設立されました。太平洋戦争によりそれらは閉鎖されたものの、終戦後、地域住民の奮闘が実を結び、喜如嘉区を軸に芭蕉布づくりが復興。現在では芭蕉布織物工房のほか、複数の工房、個人作家さんが大宜味村内を中心に村外や本州、海外でも芭蕉布づくりに取り組んでいます。

*右図に掲載していない琉球列島の地域でつくられている可能性もあります



喜如嘉の芭蕉布

琉球王国時代、芭蕉布は琉球各地でつくられていましたが、時代の流れや生活の変化で途絶えていきます。そんななか、大宜味村喜如嘉の女性たちは途絶えることなく共同作業でわざを守り伝えてきました。この「喜如嘉で伝わる“わざ”」が国の「重要無形文化財」に指定され、喜如嘉の芭蕉布保存会が“わざ”を守る「保持団体」として認定されています。また喜如嘉という地域の中で継承された伝統的な手わざによってつくられる芭蕉布は、経済産業大臣から伝統的工芸品に指定されています。

『芭蕉布物語』私版本の表紙
(画像提供: 日本民藝館)



大宜味村の工芸展「いぎみていぐま」

芭蕉布以外の工芸作家も多い大宜味村。大保ダム近くには県内でも珍しい登り窯・大宜味窯もあり、やちむんをはじめ木工、藍染めなど、さまざまな手仕事作家が日夜、制作に打ち込んでいます。そんな作家たちが一堂に集うのが、毎年春に開催される工芸市「いぎみていぐま」。イベント開始前から入場待ちの列ができるほどの大盛況。同会場内では大宜味村が所有する「喜如嘉の芭蕉布」着物の展示や羽織体験が実施されたり、地元芭蕉布作家さんの作品が展示販売されることも。開催時期や内容は毎年異なるため、最新情報は公式インスタグラム (@igimitiguma) でご確認ください！



令和7年に開催した「いぎみていぐま」開始前の出展作家たちのひとコマ